



TITLE:

京都大学経済学部創立80周年記念 古典文献展示会開催報告

AUTHOR(S):

菅, 修一; 嘉陽, 秀朗; 太子堂, 正弥; 川名, 雄一郎

CITATION:

菅, 修一 ...[et al]. 京都大学経済学部創立80周年記念古典文献展示会開催報告. 静脩 2000, 36(4): 22-24

ISSUE DATE:

2000-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37568>

RIGHT:

うより、一般に英国図書館の貴重書を公開しようという試みのもとに開発されたシステムである。英国図書館新館の展示室に設置されているモニターを指で触れると、あたかも現実の本をめくるように資料を閲覧できる。現在四種の貴重書がデジタル化され、公開されている。

このように、英国図書館では世界でもっともアクセスしやすい国立図書館として、日々進化している。これからも、利用者の立場にたったサービスの改善を行うつもりである。今日の講

演を機に、日本の皆様のご意見をいただければ幸いである。

おわりに

今回、通訳としてこの講演に参加することができた。講演の内容はもとより、私にとって通訳そのものが貴重な経験であった。このような機会を与えて下さった皆様に感謝の意を表します。

(附属図書館情報管理課受入掛 呑海さおり)

京都大学経済学部創立80周年記念古典文献展示会開催報告

経済学研究科では京都大学経済学部同窓会との共催により、平成11年10月1日(金)から10月5日(火)まで、附属図書館3階で京都大学経済学部創立80周年記念古典文献展示会を開催しました。学内外から645名の入場者がありました。入場者の皆さんからは資料に対する思い、生の声を聴くことができました。(アンケート集計結果については、経済学部図書室のホームページにて報告の予定です。)教官・院生・図書室職員が図録作成・展示会場設営・展示説明会開催と共同作業できましたことも、うれしい思い出です。展示会を支えていただいた各方面の皆様に厚く御礼申し上げます。以下は展示に携わった院生の感想です。

(経済学部整理掛長 菅 修一)

「古典文献展示会」開催をお手伝いし、10月1日から5日まで開催された、経済学部創立80周年記念の古典文献展示会は、まだ厳しい残暑の中にあつたにも関わらず、多数の入場者に恵まれました。経済学の歴史を静かに語ってくれる、淡い色彩の洋古書の展示を第1部、明治初期までの日本の姿を生き生きと見せてくれる、多彩な和古書の展示を第2部とした、少々変わ

った、対照的とも言えるような編成の展示会であつたかも知れませんが、広い分野の方々に、どちらも負けず劣らず興味を持って見て頂けたことを、心からうれしく、光栄に思いました。有難うございました。私も、もとより、まだまだ勉強不足の身ではありますが、第1部「経済学の系譜」について、展示文献の選考、図録の作成、当日の案内および洋古書に関する解説をお手伝いする機会を与えて頂きました。専攻上、洋古書に触れる機会はこれまでも比較的多かつたとはいえ、これほど大量の、稀少度の高い文献に、しかも体系的に触れることができたということは、極めて触発的な、得難い体験でした。経済学における古典文献は、経済学史における里程碑としてだけでなく、個々の経済学者、経済思想家の思考の軌跡を見るに当たっても、研究上、極めて貴重な資料です。今回ご覧頂けたものはその中の一部に過ぎませんが、大量の古典籍の蓄積を前にして、改めて先学に感謝するとともに、有効な活用、さらには将来への継承と発展のお役に立つことの出来るよう、微力ながらも、努力しようという決意を新たにしました。

末筆ながら、残暑の中をご来場くださった皆

様方、ご指導頂いた諸先生方および経済学部図書室・附属図書館の皆様方に、心から御礼申し上げます。有難うございました。

(経済学研究科博士課程：嘉陽英朗)



展示説明をする大学院生

「古典文献展示会」開催に携わって

今年は経済学部80周年ということで記念に貴重図書の展示をすることになり、そのお手伝いをする機会に恵まれました。おかげさまでたくさんの方々に見ていただくことができ、個人的には非常によい展示会になったと思います(自画自賛ではなく)。

めったに手に取ることのない貴重書に実際に触れることができるのは僕自身とても興味深い体験でしたが、学問的な価値よりもその金銭的な価値にどうしても興味がいつてしまうのは浅学非才の身のあさましさでしょうか。(一冊でも正直、僕なんかバイトしたくらいではとても追いつかないような金額だったりするので。)

まあそんなことはさておき、何よりも特筆すべきは菅さんをはじめとする経済学部図書室のスタッフの方々のご尽力でしょう。われわれ大学院生は2、3日集まって小さな原稿を一人頭十数個書いたに過ぎませんが(それ以外、原稿の半分くらいはわれわれの指導教授の田中先生がお書きになったものです)、実際のパネル作り、レイアウト、会場のセッティング等にかかった時間と手間はかなりのものだと思われ、僕などはただただ頭の下がる思いでした。

それだけに、予想以上にお客さんが来られてスタッフの皆さんが受付に追われながらもうれしそうな顔をされているのが印象的でこの企画にかかわることができてよかったと感じました。また、どう考えても日頃あまり社会科学系の古典文献に縁のなさそうな医学部、農学部、工学部といった学部からも多数来場者があり、解説の簡潔さに多少戸惑いながらも熱心に展示に見入っている姿が個人的には非常にうれしかったです。

今回の作業を通じて、数百年の時を超えて偉大な思想家達の内奥にすこしでも近づけたような感じがしたのですが、その気分の新鮮さを出来るだけ失わないようにするのが、展示会からもう結構日数の流れた今日この頃の僕自身の課題だったりするのです。(やれやれ・・・)

なにはともあれ、ご来場の皆さん、そしてお世話さまにもこの文章を読んでもらった皆さん、どうもありがとうございました。

(経済学研究科博士課程：太子堂正弥)

「古典文献展示会」のお手伝いをして

今年は経済学部創立80周年ということで記念の古典文献展示会が開催され、私もお手伝いする機会があり、図録の作成と当日の受付の手伝いをしました。図録の作成に関しては第1部「経済学の系譜」の解説の手伝いをしましたが、多くの貴重な古典に実際に触れる機会があり、非常に得がたい経験をすることができました。経済学の草創期から現代にまで及ぶ文献をまとめてみることができ、ありきたりな言い方ですが歴史の重みに耐えてきた古典の力を実感しました。

また当日受付をしていた時も予想以上の多くの方々にお越しいただき、大変嬉しく思いました。一つの文献の前にじっと立ち止まって見ている方や、学生時代の思い出を話される方、また特に第2部の『文久三年記』の紹介記事が新聞に掲載されていたということで、新聞の切抜きを持って受付に来られる方が多かったのが

印象的でした。

そして特に個人的に嬉しかったのは、普段あまり接することのない経済学部図書室の職員の方々と御一緒できたことでした。特に整理掛の皆さんとはいつもは本を間に挟んで「顔の見えない」関係でしたので、そのような方々とお話することができたのは楽しかったです。

今回の展示会をお手伝いすることで感化させ

られることが多く、貴重な文献が多くあることと共に、そのような環境の中で研究ができることのすばらしさを再認識しました。このような機会を与えてくださった田中秀夫先生、図書室の関係者の方々、来場者の皆さんに御礼申し上げます。

(経済学研究科修士課程：川名雄一郎)

「工学部等文献収集講座 工学情報をgetしよう！」について

企画メンバー

由本慶子・江上敏哲・慈道佐代子

1. 工学部等文献収集講座とは

平成11年10月5日、12日午後、2回にわたり工学部等図書事務連絡会議主催の「工学部等文献収集講座 工学情報をgetしよう！」(以下get講座)が開催された。工学部・情報学研究科・エネルギー科学研究科の各図書室職員は、工学部等図書事務連絡会議を毎月1回程度開催し業務に関する連絡や調整等を行っているが、昨年の3月に行われた会議上でこの講座の提案がなされ、その後工学部等図書職員一同が開催に向けて準備を開始した。

このget講座は、学部学生から院生、教官、職員まであらゆる層の利用者を対象に、工学系文献の収集方法や図書館(室)の使い方などについて講演形式で解説したものである。この講座を行うことにより、「今図書館(室)で何がどこまでできるのか、どこまで応えることができるのかを利用者に広報する」「利用者にどんな人が工学部等の図書室で働いているのかを知ってもらう」「図書職員がマイクを持ち、人前で話す経験をする。また各図書室で行っているオリエンテーションに役立てる」ことを目的として取り組んだ。

利用者が何を求めているのか、実際にカウンターで応対していても実に様々である。1回生対象なら、14ある工学部等図書室の場所や京大

のOPACの使い方からはじまり、院生対象になるとそれぞれの専門分野でよく使用するデータベースの検索の仕方・コツなど、ある程度対象を絞れば講座の内容も自ずから決まってくるように思う。が、今回はあえてget講座全体としての対象を絞らないことにした。工学系情報の文献収集法を中心に、その他多岐にわたる項目について、担当者が1項目あたり10分から20分程度概説を説明する方針にした。各項目の時間の少なさおよび広く浅く紹介する内容については、図書事務連絡会議でも意見が出て議論された所であった。議論を重ねる中で私たちは、情報探索方法を広く紹介することが始まりであり、当然予想される内容の詳細を知りたいという要求や出てくる疑問に対しては、get講座後のおおのの図書室での実際のサービスでカバーしていく事を確認し合った。いわばイベントとしてだけget講座を位置づけるのではなく、通常行っている私たち図書室のサービスの一環に、このget講座を取り込もうとする考え方から出発している。

実際のget講座のプログラム内容は、工学部の図書館事情、電子ジャーナルの利用、学位論文や特許資料の探し方など工学系利用者の興味を引きそうな内容、図書館(室)利用の初心者から院生教官にも役に立つ幅広い内容をそろ